

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会
ニュースレター

1991 6.1

8

情報知識学会事務局 発行 千101 東京都千代田区三崎町2-18-5(京三会館) TEL03(3263)4645 FAX03(5275)1466 ISSN0915 1133

就任のごあいさつ

本号より「情報知識学会」のニュース・レターの編集長を引き受けることになりました。7号で前任者の岩田さんより編集方針の変更がありましたが、基本的にはその路線を踏襲していくつもりです。2カ月に1度の割で偶数月の1日に発行します。速報性と新鮮さをモットーに、即時的な情報サービスを行なっていくつもりです。

ここ3～4年、“情報”を扱う様々な学会の活躍が目立っています。専門の研究に関連した各種データベース作りも盛んです。それにつれ理科系、文科系の垣根を越えた学際的な立場から“情報・データ”そのものの基本的性格を理解し、理論・体系化を目指す新しい情報知識学の振興への期待も大きくなっています。

ともすれば、余りの忙しさに“木を見て森を見ず”、といった状況に陥りがちな専門偏向から抜け出す良いチャンスです。皆さんの枠に捉われない自由な、ゆとりある情報提供の場として是非ニュースレターを御利用下さい。

当分は簡便なオフセットを主体とした印刷になるかと思います。皆様のフレッシュな“情報”をどしどし送って下さい。詳細は本号の原稿募集及び執筆要項を御覧ください。

最後に、編集長の切なる希望を一言。「早く原稿のラッシュを前に、どれを掲載していいか悩んでみたい!!」

長瀬真理

目 次

就任のあいさつ	1
「歴史研究と電算機利用」会合案内の紹介	2
「情報知識学会」ニュースレター原稿募集	4
執筆要項	5
情報知識学会誌への投稿について	6
第1回担当者会議議事録	7
学会紹介 & 人物紹介	9
学会カレンダー	10
企画委員会より	11
新しいテキスト・データベースの働き	12
編集後記	14

「歴史研究と電算機利用」会合案内の紹介

1991年5月 日
情報知識学会 会長 米田 幸夫
同 人文・社会科学系部会長
安澤 秀一
研究集会実施担当者 永村 真

拝啓 さわやかな初夏、ますます御精励のことと存じます。

さて、私ども、情報知識学会の者どものうち、人文・社会科学系部会に属するもの数人が企画いたしました、別紙趣意書のように、

「歴史研究と電算機利用の可能性—歴史系（日本史・経済史・社会史）大学院院生を主たる対象とするワークショップ—」を開催いたしたく、御案内申しあげます。

本ワークショップ開催の趣旨に御賛同たまり、貴大学院院生諸君に参加の機会を与えて頂くことができれば、幸甚に存じます。伝達については教室での口頭あるいは趣意書コピーの掲示・配布など、お手数とは存じますが、よろしく御高配のほどを、お願い申しあげます。

本ワークショップ開催については、会場および機器借用費などの一部を、参加者に負担して頂かなければなりません。参加費として、大学院院生は3千円、教官・教員は8千円を予定しておりますことを、お含みおき下さい。

なお会場準備の都合もあり、6月末日までに参加希望者の氏名を、下記、永村まで葉書にて、お知らせ頂ければ、幸いです。

〒112 東京都文京区目白台2-8-1
日本女子大学文学部史学科
永村 真

ワークショップ開催についてのお問い合わせは、上記永村 真、または下記、

〒182 東京都調布市小島町3-16-1
YSコート601
安澤秀一 FAX 0424-82-2310
ファックスにて、受けます。

「歴史研究と電算機利用の可能性—
歴史系（日本史・経済史・
社会史）大学院院生を主たる対象
とするワークショップ—」

開催趣意書

1991年5月 日
情報知識学会会長 米田 幸夫
(東海大学教授・東京大学名誉教授)
同 人文・社会科学系部会長
安澤 秀一
(明海大学教授・国立史料館名誉教授)
研究集会実施担当者 永村 真
(日本女子大学助教授)

1. ワorkshop開催の目的

パソコンの普及によって歴史研究における応用の可能性が拡大している。そこで歴史系（日本史・経済史・社会史）大学院院生によって遂行されている利用状況の情報と知識の交流を行う場を、大学や学科の枠を超えて設定する。

2. 人文・社会科学系における電算機利用の現状

本研究集会の直接目的は歴史研究における電算機利用についての情報と知識を、大学院クラスの人たちと分かちあう機会を提供しようというものである。これまで人文・社会科学系における研究手段として、哲学、米英文学・国文学や、経済学・経営学、政治学、社会学においては電算機利用が活発に行われてきた。しかし歴史学の分野ではまだごく一部で遂行されているに過ぎない。社会経済史研究においても人口史の分野での利用がみられるが、それもいまだ一般化しているとは云い難い現状である。

3. 歴史系研究における電算機利用に関する国内・外の状況

歴史研究と電算機利用との関わりについては、すでに本ワークショップ立案関係者たちによって、平成元年四月に「文字記録史料と電算機応用に関する課題と解決・研究集会」を開催し、歴史学界に大きな反響を呼び起こした。当時の参加者たちからはもとより、参加の機を逸した多数の歴史研究者から研究集会の再開を望む声が絶えない。同時に大学院在学中の院生諸君からも、院生のためのワークショップ開催の希望が強くでてきた。院生諸君にとって、さしあたりは大型計算機利用のための環境作りよりも、パソコン・レベルでの実践的議論の場を設定することの方が、より実際の対応となるであろう。

また京都大学大型計算機センタ星野聡教授、京都大学人文科学研究所付属東洋学文献センタ勝村哲也助教授らが中心になって、昭和61年以来、平成3年まで、すでに6回にわたって実施してこられた「東洋学支援データベースの研究」シンポジウムがある。この研究集会ではかなりの歴史研究分野の報告がみられ、水準向上に貢献している。しかしこのシンポジウムは、これまでの所、専門研究者のみを対象としている。

欧米を見ると、とくに電算機利用では、「Association for History and Computing」が結成されていて、1987年に開催された年次大会報告集は、2年後の1989年にマンチェスタ大学出版会から「History and Computing 2」という単行本となっている。この書物には28本の論文が掲載されていて、今日的な課題が網羅的に扱われている。部門をわける主題を紹介して、その関心のある所を見ておこう。「方法論」「教育」「データベースシステム、方法と適用」「人工知能とエキスパートシステム」「数量分析」「人口史、人口移動、社会構造」「経済と社会」「政治科学」「地域データベース」、寄稿者はスイス、フランス、イギリス、ポルトガル、ドイツ、オランダ、カナダ、スウェーデン、オーストリア、スコットランドと、ヨーロッパ諸国を網羅している。すでに報告集3冊(Manchester

Univ.P.)のほか、学会雑誌も年2回(Oxford Univ.P.)発行されている。

4. 歴史系研究における電算機利用促進の必要性

パソコンが普及して若い年齢層の間での導入が進んでいるものの、個人的な使用にとどまっている感がある。欧米ではすでに20年ばかり以前から、歴史系大学院教育のカリキュラムに電算機利用の学習が組み込まれていて成果をあげているのにくらべ、日本では未だそうした勉学の機会が十分に与えられているとは言い難い。研究手段としての電算機利用を歴史研究において行う場合の方法論や研究の対象と範囲、あるいはその有効性など、いまだ学界の一部で試行的に行われているに過ぎない。そのために院生層への公開と普及の機会是非常に限られている。しかし学問研究が公開討議を通じて発展するものと考えれば、大学院教育制度における不備を補い、大学や学科の枠をこえて議論のための共通の場を広げることは、特に日本史・経済史、あるいは社会史専攻の院生諸君にとって、必須の案件であろう。電算機アレルギーとでも云えそうな状況を抜け出すためにも、思考と実践において柔軟な院生層における積極的な利用姿勢を広く作り出すことが望ましい。本研究集会の開催は、そうした刺激の一端となるであろうし、また電算機利用の可能性を学問的に追求する契機となるであろう。

5. ワークショップ実施の内容、方法、日程等

ワークショップ開催は初めての試みなので、実験的たらざるを得ない。教官・教員のためというよりも、むしろ大学院院生を主たる対象としたワークショップ形式によって、2日間の日程で開催するものである。院生による実践例報告を5名、予定している。加えて先行研究者による実践例も若干、用意して、電算機利用の研究対象や範囲が狭く限定されることのないようにしたい。また欧米にお

ける「歴史研究と電算機利用」についての学界動向に関する基調報告も予定している。なおパソコンと周辺機器、および若干のパッケージソフトなども用意して操作上のないし技術的な質疑にも対応できるようにする。

開催日時は、参加者がワークショップにおいて得た情報と知識を検討する余裕を持てるよう、夏期休暇以前が望ましいが、準備の都合上やむを得ず、以後とする。

開催日程 1991年9月21日(土)
・22日(日)

会場 未定、ただしJRお茶の水駅周辺
を検討中、参加者に個別に通知する。

院生実践例報告

- | | |
|---------------|------|
| 1 慶応義塾大学商学研究科 | 村越一哲 |
| 2 立正大学文学研究科 | 荒巻喜光 |
| 3 早稲田大学経済学研究科 | 内田金生 |
| 4 日本大学文学研究科 | 桜井昭男 |
| 5 学習院大学文学部史学科 | 五島敏芳 |

先行研究者報告

- | | |
|---------------|------|
| 1 一橋大学経済研究所 | 佐藤正広 |
| 2 学習院大学史料館 | 保坂祐興 |
| 3 東京女子大学情報センタ | 長瀬真理 |

基調報告

- | | |
|-----------|-------|
| 明海大学経済学部 | 安澤秀一 |
| 司会・総括 | |
| 日本女子大学文学部 | 永村 真 |
| 全体助言者 | |
| 学術情報センタ | 根岸正光 |
| 全体助言者 | |
| 国立歴史民俗博物館 | 八重樫純樹 |

一般参加者

東京および周辺地域の諸大学大学院生
約30名

特別参加者

東京および周辺地域の諸大学教員
約10名

「情報知識学会」ニュースレター原稿募集

1991年度より情報知識学会のニュースレターの発行が年6回になり鮮度の高いニュースを掲載することになりました。

つきましては会員の皆様の原稿を募集します。内容は「情報」に関するものでしたら、題は問いません。

経費削減の折り、オフセット印刷による発行になりましたので次ページの執筆要項に則って御書き下さい。原稿はすべてワープロ・A4サイズお願いします。コンピュータやプリンターの機種等によって、印字等に違いが出ますが、下記のような設定で出力して下さい。B5に縮小して使用しますので、なるべく折り曲げないで御郵送下さい。題などのレイアウトも考えて頂けると大変助かります。

これまで通り、以下の記事は常時募集します。執筆ご希望、又はどなたか推薦したい方など御紹介下さい。

巻頭言

研究紹介

会員の随想

とっておきの役に立つ話

学会ニュース・カレンダー

対談記事・インタビュー

人物紹介

関連学会の動き

国際会議紹介

会社紹介・情報関係開発商品紹介

そのほか御意見、御助言、御叱責も歓迎します。

なお執筆者は現在のところ会員に限りますので、記事を書きたい方には「情報知識学会」への入会をお奨め下さい。

法人会員の広告も掲載致します。編集委員に御相談下さい。

— 執筆要項 —

出力形式： ワープロ・A4サイズ

(下記は参考までに「一太郎」の設定です。それ以外の場合は長さを御参照下さい)

左マージン：	20mm
右マージン：	20mm
一行文字数：	88文字(コラムの空間をとると 実際の1段の文字数は20文字です) (「一太郎」以外の場合1段約 7.7cm)
上端マージン：	25mm
下端マージン：	25mm
一頁行数：	43行位 (「一太郎」以外の場合1列約 24cm)
頁番号：	付けない
横書き	
袋とじ印刷：	しない
段組スペース	2段[6]コラム (「一太郎」以外の場合約 1.6cm)

長さは特に指定はありませんが、長くて3～4ページ。

出来れば半ページ、1ページ単位でお願いします)

*下記の事項は必ず原稿に添付してください。(原稿には書き込まないで下さい)

掲載希望日： 第 号 1991年 月 日 発行

氏名： 所属：

連絡先：〒

Tel

Fax

*問い合わせ・送付先

〒167 東京都 杉並区善福寺 2-6-1 東京女子大学

情報処理センター 長瀬 真理

Tel: 03-5382-6403 Fax: 03-3395-1377

情報知識学会誌への投稿について

編集委員 芦崎達雄

1988年4月に発足した情報知識学会は1990年12月に第1巻の学会誌を発行することができました。内容は人文科学から自然科学まで幅広い分野を対象としています。

情報知識学会誌の第2巻の発刊に当たって、学会誌の投稿規定について、いくつか説明をしておきます。

本誌は、SGML (Standard Generalized Mark-up Language, ISO規格8879)で編集・印刷を行ないます。SGMLとは、文書情報の国際標準として、1986年10月に国際規格となったものである。SGMLでは必要な限り文字列を要素にグループ分けして、マーク付けし、構造化します。本誌では、標題、著者名、著者所属、要約、本文、文献リスト、注、表、図です。また原稿は、図や表以外の部分については、ワードプロセッサで作成し、そのフロッピーディスクと印字したものの2部を提出して下さい。

投稿を御希望の方は情報知識学会誌のVOL1 .N01.P97-98の投稿の手引を参照して下さい。

なお第1巻の内容としては、総説記事として、「情報知識学試論」。講演論文として、「情報知識と知的所有権」。解説記事として、「生物学領域の用語名称委員会について」。報告記事として、「SGMLによる情報知識学会誌の編集印刷について」。論文としては、「構造解析法によるデーヴァナーガリー文字自動認識」、「日本語-英語対照「源氏物語」のテキスト・データベースの作成に関する基礎的研究」、「わが国における海外データベース・サービスの現状報告」、「経営管理を支援する対象駆動型シミュレーションの構成法」、「材料データシステムの統合化」の5篇が発表されました。

情報知識学の対象分野は、下記の通りです。

- ①情報蓄積・情報解析(記述法, 記述性, 同定, 識別, 管理可能性, 信頼性, 評価, 安定性,

など)

- ②情報構造(構成要素間の関係, 分類法, 分類表現, モデル, 自己組織化: 学習, 内包: 総称, 類似性など)
③情報表現, 媒体(言語, 線形, 二次元, 多次元, 加工, 変換など)
④情報流通(標準化, シソーラス, 辞書, 案内, 問い合わせ, 機密, 権利など)
⑤応用(データベース構築, 知識ベースシステム, 管理, 検索, 統合化, 高次利用など)
⑥その他上記の理論, 技術, 応用に関連した課題

また取り扱う学問領域としては、下記の通りです。

哲学, 国文学, 法令, 考古学, 歴史,
経済, 経営統計学, 教育
分類学, 用語, 図書館情報学
物理, 化学, 天文, 地学, 生物, 地理, 数学
医学, 薬学, 体育学
工学, 材料, 宇宙・航空, 制御, エネルギー,
原子力
農学, 環境
芸術, 音楽
画像, メディア, 出版・印刷

原稿は一行23字(全角文字)の30行でお願いします。原稿約3頁で刷り上がり1頁となります。論文は刷り上がり約10頁をめやすとして、原稿で30頁程度お書き下さい。

原稿の締切としては、1991年7月31日を予定しています。

送付先: 〒100 東京都千代田区永田町
2-5-2 日本科学技術情報センター
芦崎 達雄

Tel: (03)3581-6411

Fax: (03)3593-3375

第1回担当者会議（仮称）議事録

日 時 : 平成3年4月24日 18:00～21:00

場 所 : 東京大学山上会館203号会議室

参加者 : 米田、月見里、藤原、根岸、安澤、石塚、芦崎、長瀬、江成（代：川崎、高橋、岩田）

配付資料: 1-1 担当者会議（仮称）開催案内

1-2 情報知識学会拡大編集委員会議事要旨（案）

1-3 学会の現状についての報告とお願い

1-4 -1 情報知識学会収支報告（創設～1991. 4. 24）

情報知識学会 年間に係る概算費用報告

1-4-2 情報知識学会・収支会計報告

1-5 学会誌印刷経費報告

1-6 情報知識学会誌受払記録

1-7 別刷受払記録

議事:

米田会長の司会で第1回担当者会議（仮称）が開催された。

1. 拡大編集委員会（1991年2月28日）議事要旨の確認

2. 藤原副会長担当事項報告および討議

a 法人会員（特別会費）

b 法人会員

c 委託業務の内容

（1）日常的連絡、書類作成、発送など、（2）会議連絡、（3）会場準備、（4）議事録の作成（一部分）、（5）部会関係など、早急に事務局の体制を整備することが確認された。

3. 総務・会計委員関係事項報告（根岸総務担当理事）

a 発会から現在に至るまでの会計報告

・資料1-4-1, 1-4-2に沿った以下の項目につき収支決算の概算が報告された。

（1）収支決算

（2）個人・法人会費の納入状況

(3) ニュースレター・論文誌の経費実績

(4) 会議費

(5) 部会経費

(6) 事務局への委託費

b 9 1 年度の予算の作成

資料1-4-1, 1-4-2 により、説明があった。

(1) 法人会費の見込み、(2) 支出見込

c 個人会員

4. 編集委員会関係事項報告

編集委員長、論文誌WG主査、編集委員を岩田、石塚、安澤より、長瀬、芦崎、永村真（日本女子大文学部）に交代する。任期は2年とし、理学、工学系より委員の増強を行う。

5. 今後の作業分担

<藤原副会長担当事項>

a 法人会員、特別会費、b 事務局への業務委託事項、c 理事全員が各委員会に分属案作成

<総務・会計委員会関係事項>

a 年間日程表、b 予算、決算について修正案作成、c 個人会員の増強

<編集委員会関係事項>

a 年間日程表、b 投稿勧誘

<企画委員会関係事項>

a 年間日程表、b 新企画、予算

<総会日程および準備>

a 総会日程および議事次第（原案作成：総務・会計委員会および藤原副会長）

総会、理事会、担当者会議、印刷・出版など年間日程表（案）を根岸総務担当理事が担当して、次回担当者会議に提出することとなった。

6. その他

・当面、担当者会議は2ヶ月に1回を開催する。次回は5月30日（木）
18:00～20:00に開催する。

以上

シンポジウム「考古学とコンピュータ」

——吉野ヶ里をコンピュータする——

最近話題になっている吉野ヶ里遺跡をコンピュータを使って分析してみようというシンポジウムが、5月29日（水）佐賀県立美術館で開催された。日本のルーツが九州なのか、あるいは奈良なのか、といった長年の論争は専門家のみならず、一般の人々にとっても大変ロマンのあるテーマであろう。当日は国立民族博物館の小山修三教授、茨城大学の及川昭文教授による「コンピュータ・シュミレーションによる遺跡分布の推定」、大阪電気通信大学の小沢一雅、河合利幸両教授による「コンピュータ・グラフィックスによる吉野ヶ里遺跡の復元」、奈良国立文化財研究所の松井章教授による「貝塚遺跡データベースの分析」など最先端の研究が披露された。シンポジウムにあわせて前日の28日には、考古学におけるコンピュータ利用の現状と技術的課題についてのワークショップが開かれた。少人数を対象にパソコンを利用したデモンストレーションも行なわれた。なおNHKや英国のBBCも取材にかけつけるなど盛況のうちに二日間の幕を閉じた。

「モンテ・カルロとル・マン」 ポール・ライリー（英国IBM）

今回のシンポジウムには英国IBM科学研究所のポール・ライリー氏も出席し「モンテ・カルロとル・マン」という特別講演を行なった。

一見ギャンブルとカーレースの話かと紛うばかりの題であるが、中世初期のヴァイキングのマン島への定住問題に関わる問題のコンピュータによる分析がテーマである。モンテカルロは統計処理の方法の一つであるモンテ・カルロ・シュミレーションから採られたもので古代の土地単位、境界、そして異教徒ヴァイキング時代の墓に代表される重要な遺跡の関係が統計的に有意味かどうかをテストするために使用されている。

氏は5月24日（金）に京都の日本国際文化センターで開催された情報処理学会の部会「人文科学とコンピュータ」でも「Solid Models of Archaeological Data」といテーマで研究発表を行った。様々な数値データからグラフィックス・ソフトを使って遺跡を復元する有様がビデオやスライドによる美しい映像で紹介され会場の人々を楽しませてくれた。京都、奈良、佐賀、東京と飛び回る忙しいスケジュールの合間をぬって京都でインタビューすることが出来た。

英国リーズ大学で歴史・考古学を勉強した後、スタッフォードシャー・ポリテクニクのコンピュータ考古学研究所で博士号を取得、現在はウインチェスターにあるIBMヨーロッパ科学センターの研究員である。40以上の論文や著書があり、CAA(Computer application in Archaeology)及びWorld Archaeological Congress SIG Information Technology Communication and Archaeologyのチェアマンをしている。又ヨーロッパやカナダのテレビやラジオ番組でも活躍している。

リバプール出身で、会ったことはないけれど元ビートルズのメンバーの一人、ポール・マッカートニーと共通のおじさんがいるそうである。秋と冬しか季節のない涼しい英国から突然蒸し暑い真夏を思わせるような日本の陽気にだいふまいった様子。又話には聞いていたが人が多いのにはびっくり、10カ月の子供と奥さんを連れて来たかったそうであるが、結果的には良かったと述懐しておられた。6月3日の離日を前に精力的に広島、長崎、富士山にも登ってみたいと旅行日程の詰めにおおわらわであった。まばゆい夜のネオンと、何よりも擦れ違った舞子さんにどきまぎする様子がいかにもういういしい好青年であった。

（文責 長瀬）

学会カレンダー

17th IASSIT Conference 'Data in Global Village:Stewardship of Expanding Resource'

Edmonton, Alberta Canada, 1991,5,14-17

記録管理学会、姫路独協大学、1991,5,25-26

記念講演：須田勇氏「脳生理学における言語管理」

Tutorials and International Conference on Current Issues in Computational Linguistics,

Universiti Sains Malasia, Malaysia, 1991, 6, 10-14

29th ACL, Berkeley, California, 1991,6,17-21

29th ACL(Student Session), Berkeley, California, 1991,6,18-21

Reversible Grammar in Natural Language Processing, Berkeley, California,
1991,6,17

3rd Conference on Applied Natural Language processing, Trento, Italy

1991,6,18-21

S G M L 懇談会 総会

特別講演：Mrs. Susan Hockey(Oxford University Computing Service), 1991,6,27

テキスト・データベース研究会ワークショップ、東京大学大型計算機センター

特別講演：Mrs. Susan Hockey(Oxford University Computing Service), 1991,6,28

人文科学&コンピューティング・シンポジウム、機械振興会館

特別講演：Mrs. Susan Hockey(Oxford University Computing Service), 1991,6,29

Summer School in Computational Linguistics, Prague, Chzechoslovakia, 7, 8-21

Computational Approaches to Non-literal Language(IJCAL),Sydney, 1991,8,21

International Joint Conference on Artificial Intelligence, Sydney, 1991,8,24-30

情報処理学会「人文科学とコンピュータ」金沢工業大学, 1991,9,6

情報知識学会後援「歴史研究と電算機利用」会合, 1991, 9,21-22

Quantitative Linguistics Conference(QUALICO), University of Trier, Germany
1991,9,23-27

Computers and Language 1991: Towards 1992, Sheffield mCity Polytechnic

1991,9,25-27

7th International Oxford English Dictionary Conference, Oxford

1991, Sep 30 - Oct 1

ACM SIGIR '91,Chicago, 1991, 10, 13-16

3rd Conference on Situation and its Application, Oiso Prince, Kanagawa

1991,11,18-21

Computers and Teaching in the Humanities Conference, University of Durham

1991,12,16-19

4th Conference on Applied Natural Language processing, Trento, Italy

1992,4,1-3

ALLC-ACH92, Oxford, 1992,4,5-9

COLING-92, Nantes, France, 1992,6,23-28

International Conference on fifth Generation Computer Systems 1992, Tokyo
1991, 6, 1-5

企画委員会より

企画委員会

江成保徳，高橋靖明

1. 本年度の企画をたてるにあたって

前回のシンポジウムは第1回目ということもあって、当学会のアピールを兼ね「情報知識学とは」を中心に学識経験者の講演および藤原（譲）先生の司会によるパネルディスカッションの形式としました。

学会として最初のシンポジウムではありましたが、関係各位の多大な御協力のおかげで、延べ150人収容の会場が満席になり、盛況のうちに開催することができました。

引き続き、当企画委員会では本年も新たな企画をたてるべく、現在、次のような計画を検討しています。

①当学会の対外認知を広く高めることを主眼とし、前回のような形式で多くの参加を募る。

または、

②当学会の主旨に沿ったジャンル、内容の研究発表の場としての中規模セミナー／ワークショップの形式。

2. テーマについて

情報知識学会のスタンスを分かりやすくアピールできるものをテーマとしてとり上げ、現在、情報処理関連の他の学会、団体との差を出していきたいと思っています。

3. 日程について

企画の形式、内容にもよりますが、おおよそ下記の日程で進める予定です。

5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
	テーマ ・ 内容 決定	講師 ・ 会場 選定 共催	案内			
				<----（実施）---->		

4. お願い

できるだけ皆様の意見を反映し、実のあるものにしたいと思っていますのでジャンル、講演者、内容、その他何でもご希望の要件がありましたら下記へご連絡下さい。

連絡先：大日本印刷株式会社 C & G 開発室 江成保徳

〒162-01 新宿区市谷加賀町1-1-1

Tel. . 03-3266-2560

Fax. . 03-3266-2309

新しいテキスト・データベースの動き

東京女子大学情報処理センター 長瀬 真理

高度情報化社会の担い手であるコンピュータの発展には目ざましいものがあり、ひと昔前の”数値”処理から”文字”、”画像”、”音声”といった文化と関連の深い領域にまで拡大している。その意味で、”文化”もすでにコンピュータによる、処理・加工・伝達可能な”情報”であると言える。

これに応じて、これまで理科系の学問に比して遅れていた人文系の研究にもコンピュータが徐々に導入されるようになった。しかし既に蓄積されつつあるデータや情報の評価あるいは具体的な利用はもとより、それ以前の”一体何を情報やデータとすべきか”、といった基本的な事柄については、これまで十分に論議されていたわけではない。とりわけ文科系の学問における”情報化”の問題の究明、理論体系化、その応用を対象とする個々の学問分野の確立は非常に遅れている。そこで、文字情報の代表ともいえるテキスト・データベースを取り上げ、それに関連する最新の動きを紹介してみたい。先ず、その作成の根幹に影響を与えるのみならず図書館、出版、印刷等への多大な影響が予想される文字情報の入力標準化の動き(SGML)から始めよう。

1. SGML

欧米ではビジネスの世界に平行して、新たに学術サイドからTEI(Text Encoding Initiative)やCentre for Computing in the Humanities(Toronto University)の研究者グループが中心になって、SGML(Standard Generalized Markup Language:標準一般化マーク付け言語)方式による付加価値の付いたテキスト・データベースの研究や実験的な作成が盛んに行われている。SGMLは文書の論理構造、例えば著者や表題等のデータ項目を後から項目別に検索できるように、タグと

して挿入しながら作成する方式で、多面的な読みを可能にするばかりでなくハイパー・テキストの作成にも威力を発揮する。既にISOやECで、そのタグの標準化がビジネス・ドキュメントを中心に進められている。COCOA形式に似ていることから、オックスフォード・アーカイヴでサービスされている900以上のテキスト・データベースのSGMLへの変換も現在進行中である。Oxford University Computing Service(OUCS)が開発した文章解析プログラムであるOCPのバージョン・アップもSGML対応が第一課題になっている。SGMLでは、文書自身をその文書を構成する要素とその要素間の論理的な構造に関して記述し、文書間の交換を容易委にするために考案された一種のメタ言語である。個々の文書や文字の属性を定義しておけば、媒体や出力装置に依存することなく文書の内容のみを交換可能にする。属性情報には文章の階層的な論理構造を示す、”表題”、”見出し”、”節”や”脚注”を始め”倍角”や”イタリックス”といった文字の指定等も含まれる。

既に米国の出版協会、国防省始め、EC出版局も採用を決め、現在標準化の作業が進められている。特に共通語を決めなかったECではこの作業が急務となっている。1992年の経済統合を目前にひかえ膨大な資料を各国の言語に翻訳しなければならず標準化は機械翻訳を促進するためにも重要な課題である。今後チェコスロバキア等東欧諸国の加入の可能性も高まりSGMLへの期待はますます大きくなりつつある。日本でも現在SGMLをJIS規格にする動きがでている。

その意味でそろそろ日本にも学術サイドからの”日本版TEI”のプロジェクト等の設立が必要であろう。現在少しずつ各地で始まっている日本の古典のテキスト・データベー

スもSGML方式による作成が可能であり、それは専門家のみならず、学生や一般の人々にも、テキストの多面的な読みを可能にする。例えば、「源氏物語」では登場人物の呼び名や官職がしばしば変わる。主人公の源氏は、光、君、若、おとど、六条院、大将、大殿、院、男君、など30以上の呼び名を持つ。又中国の文献からの引用も多い。そのたびごとに、後の付録の家系図などをいちいちひっくり返して調べながら読み進まなければならない。こういった項目ををタグとして挿入し、参照部として別ファイルに家系図や外来語を入力しておけば、コンピュータの画面上で、それらの情報へ飛んだり、画面分割によって同一画面で調べることも容易になる。又呼び名の変遷を通してテキストの順番や書かれた年代の推定等の研究もできる。あるいは和歌、注釈のタグを付加することも可能であろう。そうすれば読者は和歌だけを取り出して研究することもできる。又現在、源氏物語の絵巻物が出版されている。絵巻と一緒に、今回削除した平安時代の服装や小物等の挿絵と一緒に画像データベースとして組み込むことも技術的には既に可能である。更に、源氏は優れた音楽演奏者で、宴の場面や楽器の演奏場面もよく出てくる。古代の楽器の奏でる音楽をミュージック・ソフトの技術で再現することも可能である。最早、文字と音と絵とを組み合わせたハイパー・テキストの作成も夢ではなくなっている。

2. パラレル・テキスト・データベース

日本研究が世界各地で盛んになり、もはや日本に行かなければ日本研究は出来ないという時代は終わった。その意味で研究と教育の両方に役立つ、日本語と英語の相互対照が可能な、いわゆるパラレル・テキスト・データベースの需要は多い。我々が様々な外国文学研究で苦労するのと同様、海外の日本研究者や学生は日本語に苦労している。日本語と翻訳の両方の比較はもちろん、語彙の研究にも

コンピュータは大いに威力を発揮するであろう。オックスフォード大学では、筆者の供託した「源氏物語」テキスト・データベースを使ったコンピュータによる”あはれ”の語についての日英比較研究のプロジェクトが発足している。残念ながらテキスト・データベースに対する理解や開発という点で、我国のこの分野での世界への貢献は経済の図式とは逆に輸入超過の傾向にある。その意味で今後より多くの日本文学や古典及びその翻訳書のテキスト・データベース作成が必要であろう。併せて日本国内にもテキスト・データベースを海外にサービスする機関の設置が急務となるだろう。

3. 複数のテキストの比較研究

――文章解析ソフト開発の必要性――

一つのテキスト・データベースを作成すると必ずその選択に不満を持つ研究者がでてくる。例えば「源氏物語」でも青表紙本や河内本、別本を始め、全ての校訂本や写本までをも入れるべきだ、という意見は当然予想される。しかしこれは今日のコンピュータの能力を考えると不可能なことではない。現に英国では、写本研究や比較文献学、あるいは学生の教育用に、幾つもの版を入力したハイパー・テキストやソフトが開発されており、普通では入手しにくい貴重な文献に誰でもアクセスすることが出来るようになっている。

4. 電子化古語辞典の必要性

コンピュータによる古典研究の環境を整備するためには、内在資料としてのテキスト・データベースや検索ソフトの開発が必要であるばかりでなく、様々な背景への理解を助ける為の外在的資料として、同時代に書かれた他の作品のテキスト・データベースが必要であると同時に、電子化古語辞典が必要不可欠である。既に海外では様々なテキスト・データベース作成と同時に、SGML方式による

辞書作成が盛んに行なわれており、OED (Oxford English Dictionary)のCD-ROM版は大きな成果をあげている。これを使うと、語源がアラビア語あるいはヘブライ語の言葉を一八世紀のテキスト中から探す、あるいはディケンズのテキストから探す、といった昔なら一人の研究者が何年もかかるような作業があつという間に出来る。辞書を一番使うのはいうまでもなく研究者である。このような辞書を見ると末端のユーザーである文学研究者の意見がいかに良く反映されているかが解る。欧米では辞書の権威は学者・研究者の使用に足るものかどうかで決まる。質の高い辞書学(lexicography)の長い伝統の蓄積と最先端のコンピュータによるデータベース作成技術であるSGMLの結合の見事な成功例といえるだろう。

日本でも将来この種の大規模な辞書作成のプロジェクトは確実に必要となるであろう。言葉は数字と違って曖昧である。重要な語や語句程、意味も広く、多様であり、沢山の用例研究を必要とする。日本文化の重要なキーワードである、“わび”、“さび”なども、時代の流れ、解釈により意味は多様化してい

る。それらの語の用例が日本の古典の中から全て検索することが可能になれば、意味の変遷の研究に大いに役立つであろう。先に挙げた”あはれ”にしても、「源氏物語」だけでなく、「伊勢物語」や「古今集」等を網羅した電子化辞書が出来れば、研究者のみならず多くの人々が恩恵を受けるであろう。一方、消滅してしまつて全く使われなくなった語句も多い。変化し崩れつつある日本語を保存するためにも古語辞典の電子化プロジェクトは必要であろう。

以上最近のテキスト・データベースに関連する様々な動きを紹介した。特に日本の古典については未解決の問題が多く、ほとんどか希望や期待で占められてしまったのは残念である。利用やサービス面でのネット・ワークは整備されつつある。しかしサービスすべき情報自体研究や関連するソフト等の開発は非常に遅れている。文化の根幹を成す古典的なテキスト・データベースの作成、それらの研究を支援するソフトの作成や教育用ハイパー・テキストの作成、そして何よりも電子化古語辞典の開発など課題は沢山あるが、今後関係者の貢献に期待したい。

編集後記：

渡英前の”ボディコン”原稿が災いして編集長にさせられた、という怪”情報”に苦笑しております。格調高かったハード畑の岩田さんから、どうころんでも文系人間の長瀬にバトン・タッチ。専門は哲学とはいえ、文面がソフトに変わりそうで少々心配しております。御意見、御叱責、御怒りを編集部まで御寄せ下さい。

”おだまりアインシュタイン”というフレーズで始まる技術者向けの転職マガジンの宣伝がTVで人気を呼んでいるそうです。今回は引継その他もあり、編集長（雑用係？）の特権を行使し、だいぶ原稿を書きました。そろそろ”おだまり編集長”の声が聞こえて来たようです。なお哲学者のための転職マガジンが発売されたらすぐ御一報下さい。

（長瀬）